

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370910

研究課題名(和文)「地魚・雑魚」の漁撈活動・利用の史的展開と今後の活用

研究課題名(英文) The relationship between local fish and humanity from the viewpoint of the studies of historical geography and folklore

研究代表者

橋村 修 (HASHIMURA, Osamu)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00414037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域資源の一例として「地魚・雑魚」利用の江戸時代以降の歴史と現況について解明し、今後の展望をおこなった。調査地は、九州地方、三陸地方、伊豆諸島、沖縄諸島、地中海マルタ、韓国に設定し比較を試みた。

「地魚・雑魚」の利用の歴史については、江戸時代の鹿児島地方を事例に、江戸時代と現在の魚利用を比較した。現在の「地魚」利用については、現地調査研究を踏まえ、次の3つに区分した。A捕魚された地域で利用される「ローカル」な魚、B生産地から消費地(農村や山村)に流通する「リージョナル」な魚、Cネット情報等も利用しながら広域流通する「グローバル」な魚。地魚の事例としてシイラ利用の歴史を解明した。

研究成果の概要(英文)：This study is focused on historical geography and folklore of the relationship between local fish and humanity. Research target areas are Japanese Islands, Ryukyu Islands, Malta in the Mediterranean Sea. In this study, we found three patterns of the use of local fish. The next question remains as to why dolphinfish (*Coryphaena hippurus*) were auspicious during the Edo Period until the first half of the 20th century. In my opinion, the reason why dolphinfish became a cheap and low-class fish is possibly related to the development of preservation technology through the introduction of refrigerators, by which the widespread distribution of tuna and bonito fish became possible while dolphinfish became comparatively tainted. Through the analysis of relationships between fish and humans, we can observe historical preferences in fish consumption across space and time, noting how and why specific variables have come into play to structure subsistence patterns.

研究分野：歴史地理学

キーワード：地魚 雑魚 地域 資源 沖縄 シイラ 民俗 マルタ

1. 研究開始当初の背景

地域資源の有効利用や地産地消が叫ばれる昨今であるが、漁業や地理学研究では経済的な価値の高いクジラやマグロなどの漁業の研究が進む一方で経済的に価値の低い漁撈については等閑視されてきた。

海と人との関わり、魚と人との関わりについての研究は、多いとは言えないが、マグロ、カツオ、タイ、エビなどのような経済的な価値の高い魚をめぐる漁業や捕鯨に関わる研究は蓄積が進んでいる。そうした学界の動向のなかで、経済的な価値の低い「地魚・雑魚」と人との関わりの研究を進めることには、資源の有効利用や循環利用が注目されている現代において、少なからず意義があるものと思われる。農林水産省は、「未利用魚」の活用を主張している。ただし、未利用魚のなかでもその地域で過去に食べられていた魚の活用が大事だと思われる。現在、「雑魚」と扱われている魚でも、歴史的に遡れば、各地域において重要な魚(地域の魚=地魚)として扱われていたものもあった。都市部で好まれる魚(マグロ、タイ、カツオその他)を漁村で捕獲するようになる流通経済の展開のなかで、「地魚」の価値は大きく下がり、「雑魚」になっていった。こうした「雑魚」を正面から見据え、その価値を再確認する必要がある。

近世から現代までの漁業史研究では、漁獲物の流通や漁場地代論、捕鯨などの大規模漁業の経営史などといった漁業経済的な研究の蓄積がある。一方で、漁業技術、漁場利用、おかず漁業としての漁撈、魚の村落内での分配にあるような「生業」としての漁業史研究の蓄積は依然として少ない。これは、澁澤敬三氏が魚名の研究と漁業史、漁業民俗研究の融合を目指したテーゼを提示したにもかかわらず、漁業史と漁撈民俗研究が分離していたため、十分に行われてこなかった結果だといえる。それでも、近年では、網野善彦氏による海民史や社会史研究の影響を受けて、社会史と経済史を融合した漁業史研究が増え、資源利用に関わる議論も行われている。漁業史と民俗学・地理学を融合させる研究がおこなわれるべき時期に来ている。

では、研究課題である「地魚・雑魚」の漁撈活動・利用の史的展開と今後の活用というテーマに関わる学術的な意義を説明する。日本列島周辺海域には多くの種類の魚が四季を問わず生息するが、食卓に出てくる魚介類は、マグロ、カツオ、タイ、ブリ、エビ、タコなどのように、養殖魚種や海外からの輸入に頼る魚が多くを占めている。冷蔵庫が普及する前の段階では、魚の流通には限度があるので、各沿岸で獲れた魚に限られた範囲で流通し、消費されていた。こうした「地魚」に代わって主要な魚が全国に流通することで、資源の枯渇も進んでいった。その過程で「地魚」は、漁獲の対象にならなくなり、「雑魚」として扱われ始めた。本研究では、必ずしも

経済的に優位でない「地魚・雑魚」であるシイラ、トビウオ、カジキ、スズキ、ウツボ、ヤガラなどを取り上げる。経済的価値の低い魚について、決まった時季に来るからこそ貴重な現金収入源となる点、それらの魚に対する聖性やタブー、それらの魚と人との関わりの来歴に注目する。そうすることで、過去に食べられていたが、現在食べられていない魚を食卓に戻す動き(食育活動)についても提言していきたい。「雑魚」を用いた地域おこしや学校給食での活用にも役割を果たせるものと思われる。

本研究の動きは、地産地消の普及に対する人文科学研究の側からの貢献という学術的な意義もある。本研究を進めるうえで、史料の発見と保存、古老たちへの聞き取り調査が不可欠であるが、これは緊急を要する問題である。また、文字史料に残りにくい「地魚・雑魚」の漁撈活動の歴史を知るためには、近世近代の漁場図や漁業絵図などの絵画資料を活用することが有効である。海関連の絵画資料の研究は非常に少ないので、本研究では積極的に進めていきたい。文字史料や絵画資料の内容について具体的に知るためには、少しでも昔のことを知る人から話をうかがうことが重要である。申請者は、近世の漁業史、漁業絵図に関する研究を蓄積し、研究方法のノウハウを見出してきた(橋村修『漁場利用の社会史』人文書院、2009年)。その土台に立ち、歴史と民俗・地理の研究をつなぐ方法論を示し、実践するために、本研究を立ち上げた次第である。

2. 研究の目的

本研究では、日本列島と周辺地域、海外における「地魚・雑魚」の漁撈活動と利用について、その歴史的展開と現況をおさえながら、今後の活用についても目配りしつつ、歴史地理学、漁業経済史、民俗学的な手法を用いて解明を進めていく。「地魚・雑魚」は、経済的に価値の高い魚と比べると注目されているとは言えないが、自然資源の有効利用が叫ばれる現在において、その活用や来歴が注目されている。その際、その魚が地域に根差した魚であるのかという点に注目する必要がある。そうした研究を進めるためには、江戸時代以降の歴史史料や漁場絵図、漁業図などの絵画資料と、民俗学的な聞き取り調査内容を融合させて考えていく必要がある。従来の研究では、歴史的な視点が欠けていたことは否めないため、本研究を行う余地は十分にあるものと確信している。

そこで、本研究では、経済性の低い「地魚・雑魚」利用の過去から現在までの展開について、各地の事例を、フィールドワークと歴史史料調査をおこないながら解明をおこなうことにした。

3. 研究の方法

各地の事例を、フィールドワークと歴史史

料調査をおこないながら解明する。

漁業史料については、独立行政法人中央水産研究所図書資料館と神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する戦後の漁業制度改革で収集、筆写された全国各地の近世近代の漁業関係筆写稿本、鹿児島県奄美市立博物館の童虎山房文庫（原口文庫）を利用する。そして、筆写稿本史料の存在する地域での史料調査と聞き取り調査を実施する。調査は、漁業制度改革筆写稿本のある千葉県旭市、三重県志摩市、対馬暖流域の新潟県柏崎市、九州の福岡県、長崎県壱岐、熊本県、鹿児島県、原口文庫のある鹿児島県奄美大島において実施する。これらの歴史史料の内容について、古老への聞き取りをおこない、具体的な内容を掘り起こしていく。この作業は高齢化が進む中で急務である。

現地フィールドワークは、伝統的な漁撈儀礼や魚の利用の地域振興事業のおこなわれている東京都青ヶ島村、八丈町、新島、式根島、鹿児島県各地、沖縄県国頭村宜名真、伊平屋島、南大東島、北大東島、地中海マルタ島（シイラ漁業と開始儀礼）などにおいて実施した。地域の振興に伝統的な漁業がどういう役割を果たしているのか、伝統儀礼や地域おこしの事業（未利用魚活用）に注目した。

そうした事例研究を踏まえ、比較研究、地理学、民俗学の議論のなかでの位置づけをおこない、学会等で報告し、成果を各ジャーナルに投稿する。

4. 研究成果

「地魚・雑魚」の利用の歴史展開については、鹿児島県の事例について、原口文庫の漁業史料、および『三国名勝図会』『薩隅日地理纂考』『旧薩藩沿海漁場図』などを用いて、鹿児島藩域の江戸時代の魚利用と現在との比較をおこなった（橋村 2015）。

		現在	現在	現在
		県内全域	一部地域	なし
江戸期	藩内全域	A	F	C
江戸期	一部地域	E	B	D
江戸期	なし	G	H	

A 江戸時代から現在に至るまで藩内・県内全域で利用されている魚

B 江戸時代から現在に至るまで藩内・県内の一部の地域で利用されている魚

C 現在の鹿児島県内では利用されていないが、江戸時代には藩内全域で利用されていた魚

D 現在の鹿児島県内では利用されていないが、江戸期時代には藩内の一部の地域で利用されていた魚

E 江戸時代には藩内一部の地域で利用されていたが、現在では県内全域で利用されてい

る魚

F 江戸時代には藩内全域で利用されていたが、現在では県内の一部の地域で利用される魚

G 江戸時代には利用されていなかったが、現在では県内全域で利用されている魚。

H 江戸時代には利用されていなかったが、現在では県内の一部の地域で利用されている魚。

このうち、Eが現在の「鹿児島の魚」として広く認知されているキビナゴ、バショウカジキなどに該当するとした。「県の魚」という位置づけと「地魚」という位置づけには違いを意識する必要があるといえる。

三重県志摩市、新潟県柏崎市、福岡県、長崎県などの地魚利用の歴史的な事例についての研究は、論文投稿を進めている。

次に現地フィールドワークの成果を取り上げる。

国内の事例からみていこう。鹿児島県内については鹿児島県漁連と鹿児島市魚市場に通い、ヒウチダイ、メジナ、クロダイ、キビナゴ、バショウカジキなどの利用を調査した。キビナゴについては、薩摩川内市甕島におけるキビナゴ活用による地域おこしについて調査し、成果を報告した。

東京都青ヶ島では、地魚の「クジラヨ」「トビウオ」「シイラ」などの地魚の調査を実施した。八丈島では、近世期から近代における漂流者や流人による漁業実態や八丈漁協婦人部による地魚を用いた特産加工品について調査した。ほかに式根島でも調査を実施した。また、伊豆稲取の地魚であったキンメダイが関東地方の高級魚になるプロセスについても調査した。

沖縄県国頭村では、2014年に2回、2015年に2回調査を実施した。2014年11月には、同村宜名真地区主催の「フーヌイユ祭り」の調査を実施した。筆者は、1999年と2000年に当地でおこなわれた「フーヌイユとパヤオ祭り」にも調査参加したので、その違いや変化を調査した。また、2015年10月には宜名真地区のシイラ漁業開始の伝統儀礼である「イシノウガン」を見学調査した。この儀礼についても筆者は1999年に調査したことがあったので、維持する意味について注目した。11月には、前年に引き続いておこなわれた「フーヌイユ祭り 宜名真にフーあり」に参加し、講演会「世界のシイラの歴史」を実施した。宜名真ではシイラを「フーヌイユ」と呼ぶ。この「フー」とは「運がいい」などの意味があることを再確認した。

沖縄では、伊平屋島や南大東島などの地魚利用についても調査を実施した。

次に海外の調査研究成果をみていこう。地中海マルタの「地魚」利用について、2013年と2015年に調査を実施した。2013年の調査では、シイラ（ランブーキ）釣船に乗って、漁場の確認と釣りについて記録をおこなっ

た。また、魚の食普及を進めるイベント（シイラ祭り、マグロ祭りなど）の情報も得た。2015年8月の調査では、マルサシュロック村におけるシイラ（ランブーキ）の漁業開始準備と教会司祭による開始儀礼（シイラ漁船のみを回ってのプレシング）の調査をおこなった。

韓国では、ソウル市内の魚市場と仁川の漁港で、エイヤイシモチ（クルビ）などの「地魚」利用の調査を実施した。

各地の事例を踏まえ、「地魚」について以下のように類型を提示した（橋村2015）。

A その地域で獲れて消費される魚（ローカル）

B 生産地から消費地である農村や山村といった後背地に運ばれ消費される伝統的魚食（リージョナル）

C グローバル化のなかでネット情報等も利用しながら広域流通する「地魚」。

引用文献

橋村修、江戸末期薩摩藩領内の海産物からみた「地魚」利用、国際常民文化研究機構年報、5巻、2015、145 -15

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 8 件)

橋村修、江戸末期薩摩藩領内の海産物からみた「地魚」利用、国際常民文化研究機構年報、5巻、2015、145 -15

橋村修、地域の和食 キビナゴ 鹿児島海の幸、BIOSTORY、査読有、22巻、2014、75 -77

橋村修、学界展望 水産業、人文地理、査読有、66 3、2014、71-72

Hashimura Osamu , The History and Culture of Dolphinfish(*Coryphaena hippurus*) Exploitation in Japan, East Asia, and the Pacific , Terra Australis , 査読有、39 (Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions) , 2013 , 141-151

橋村修、地中海マルタにおけるシイラ漁業と沖合集魚装置漁業、国際常民文化研究叢書、査読有、1巻、2013、153-160

橋村修、コスタリカにおけるシイラの漁業と利用、国際常民文化研究叢書、査読有、1巻、2013、47 55

橋村修、日本列島周辺海域における回游魚シイラの漁業と利用 - 明治 20 年代 ~ 平成 10 年代 - 、国際常民文化研究叢書、査読有、2巻、2013、159-178

橋村修、沖合集魚装置漁業をめぐる漁場利用の史的展開、国際常民文化研究叢書、査読有、1巻、127 151

〔学会発表〕(計 8 件)

橋村修、近世・明治期の漁場図、沿岸絵図

にみる景観表現 - 歴史地理学からのアプローチ - 、第 19 回常民文化研究講座「シンポジウム『漁場図』を読む」、2015年12月5日、横浜市

橋村修、世界のシイラ（フーヌイユ）の歴史、宜名真にフーあり 宜名真フーヌイユまつり、2015年11月29日、沖縄県国頭村

橋村修、海の民俗学、韓日共同学会議民俗学の過去と現在、2015年8月24日、韓国・ソウル

橋村修、東南アジア漁師の漁業出稼ぎ、東京学芸大学フォーラム国境を越える東アジア シンポジウム、2014年12月20日、東京

橋村修、埼玉南部の漁業の歴史地理 鰻文化を軸に - 、埼玉県立文書館地図教室、2014年10月4日、さいたま市

橋村修、「地魚」利用をめぐる歴史・現状と課題、生き物文化誌学会第12回学術大会、2014年8月2日、東京

橋村修、「雑魚」「地魚」「ハレの魚」としての回游魚をめぐる歴史民俗、国際常民文化研究機構 共同研究グループ 合同成果発表会「魚と人の関係史」、2014年2月15日、横浜市

橋村修、アジア・オセアニアにおけるシイラをめぐる利用と文化、国立民族学博物館共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究 資源利用と物質文化の時空間比較、2014年1月26日、大阪府

〔図書〕(計 11 件)

橋村修 他、勉強出版、博物館という装置 帝国・植民地・アイデンティティ、2016、83 - 103

橋村修 他、鹿児島県始良市役所、始良市誌 地図絵図編、2016

2015年
橋村修 他、東京学芸大学橋村研究室、飯岡地区下永井の民俗 - 千葉県旭市 - (東京学芸大学民俗調査ゼミナール2010年2011年度調査報告書) 2015、100

橋村修 他、東京学芸大学、越境の動態的領域研究 空間とカテゴリーの越境の地域間比較をめざして、2015、29-36

橋村修 他、東京学芸大学、被災地（「東北地方太平洋沖地震」）に暮らし続ける人々の経験と記憶に関する実践的研究、2015、3-12

橋村修 他、東京学芸大学、国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究、2015、48-57

橋村修 他、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度成果報告書、2015、491-498

橋村修 他、東京学芸大学、比較地域研究の新たなフレームワーク構築にむけて モビリティをめぐるマイノリティとジェンダ

一の諸相、2014、51 - 60

橋村修 他、東京学芸大学、「東北地方太平洋沖地震」で被害を受けた地域の現状と支援課題に関する継続的研究、2014

橋村修 他、東京学芸大学、マイノリティとジェンダーの視点からみる人口流動：教育資料開発にむけて、2013、65-73

橋村修 他、冬弓舎、漁業、魚、海をとおして見つめる地域、2013、166 179

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

[http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakug
ei/hp/hasimura1.html](http://univinfo.u-gakugei.ac.jp/u-gakug
ei/hp/hasimura1.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋村 修 (HASHIMURA OSAMU)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00414037

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：